

AA 研フォーラム

日時: 平成 23 年 12 月 15 日(木) 午後 2 時～午後 4 時 15 分

場所: AA 研マルチメディア室(304)

■研究会プログラム

14:00-14:30 荒川慎太郎 (AA 研所員)

「西夏語で書かれた設計図—近年の西夏語文書読解から」

14:30-15:00 近藤 信彰 (AA 研所員)

「マイクロヒストリーの挑戦—19 世紀イラン史の文脈で」

15:00-15:10 休憩

15:10-15:40 太田信宏 (AA 研所員)

「現地語媒体による人文系研究の行方—インド・カンナダ語圏における「文化研究」を題材に」

15:40-16:10 西井涼子 (AA 研所員)

「日常性が壊れるとき—南タイのムスリム・仏教徒関係」

AA 研フォーラムを活性化すべく、本年度から新たな試みとして、複数の所員がそれぞれ短時間で自身の最新の関心や成果を踏まえた研究発表をする会を催すことになった。この方式による初めての研究会となった今回は、言語・歴史・人類学をそれぞれ専門とする 4 名の所員に報告をしてもらった。限られた時間の中でもフロア参加者との間で活発な議論がなされ、地域やディシプリンを超えた研究交流に大いに資するものとなった。以下報告順に報告の概要を示す。

(文責: 津田浩司/AA 研所員)

荒川慎太郎 (AA 研所員)

「西夏語で書かれた設計図—近年の西夏語文書読解から」

ロシア国サンクト・ペテルブルグ市、ロシア科学アカデミー東方文献研究所には「Tang. 46 inv. No. 156 (2006) st. inv. No. 5217」と整理される、興味深い西夏文字写本が存在する。手書きの図に、西夏数字や

部品名と思しき文字が書き込まれた資料で、一部が欠損している。かつてクチャーノフ・ゴルヴァチェーヴァ（1963）では「名称なし。楽器の構造図」とされて、その説が踏襲されてきた。本発表では、図像の解釈と西夏文字の判読に基づき、新たな解釈を提案した。

（文責：荒川）

近藤信彰（AA 研所員）

「マイクロヒストリーの挑戦—19 世紀イラン史の文脈で」

1980 年代以降、歴史学は個別実証研究を中心に展開してきた。イデオロギーから解放され、研究の精度は格段に向上したものの、研究の個別化・細分化はその極に達している。それを克服すべく、グローバルヒストリーや世界史、比較史といったものが重視される傾向にある。本報告では、19 世紀のイラン史を題材に実証研究の進展とその問題点を指摘し、マイクロヒストリー的研究により実感のともなった新たな研究の可能性があるとした。

もはや、個別実証研究に安住することは許されない。しかし、これまで積み上げてきた実証研究は決して無駄ではなく、これを生かして、新たな歴史像を築くことが求められている。

（文責：近藤）

太田信宏（AA 研所員）

「現地語媒体による人文系研究の行方—インド・カンナダ語圏における「文化研究」を題材に」

アジア・アフリカ地域を対象とする人文研究の相当部分は、英語をはじめとする欧米諸言語ではない現地諸語によって実施され、成果発表が行われている。本報告は、欧米での欧米諸語(主に英語)による人文研究の影響を直接・間接に受けながら展開する現地語媒体による人文研究の現状と今後の可能性について初歩的な考察することを目的とし、その題材として、インド南部のカンナダ語圏(カルナータカ州に相当)社会を対象にカンナダ語媒体で行われる人文系研究、なかでも特に近年盛んとなっている「文化論」を取り上げる。

カンナダ語による現代カンナダ社会研究の 1990 年代以降の大きな潮流として、「文化(samskṛti)」を分析・考察の対象とする「文化論(samskṛti ciṃtane)」、「文化的研究(sāmskṛtika adhyayana)」の盛行を指摘できる。カンナダ語媒体の「文化論」は、①「文学、音楽、演劇、彫刻、絵画などの諸芸術に関連した創造的な活動」としての文化から、「人間集団の生活様式の総体」としての「文化」へと文化概念を移行・拡大させ、②文化表象が内在する政治性・権力性を暴き出す、といった点に、イギリスではじまった「カルチュラル・スタディーズ」の影響を認めることができる。一方で、①研究分析の対象として取り上げられるのは、主に文学、宗教的实践(儀礼)であり、社会的実践や日常的行為はほとんど論じられない、②周縁的な集団の「文化」を主流／支配的文化とは区別される実体的なものとして把握する、など「カルチュラル・スタディーズ」とは異なる要素、傾向性も見られる。

このような「文化論」の特徴(あるいは、「カルチュラル・スタディーズ」からの「逸脱」)は、カンナダ語圏社会の歴史的、政治的、学術的文脈のなかに位置づけて考察されるべきものである。欧米の人文研究か

ら影響、刺激されつつ、現地の諸要因に規定されるかたちでそれを選択的に受容して(あるいは、「翻訳」して)展開される現地語媒体による人文研究は、世界の多様性を把握、記述するうえで学術的にも重要な手掛かりを含んでいるのではないであろうか。

(文責: 太田)

西井 涼子 (AA 研所員)

「日常性が壊れるとき—南タイのムスリム・仏教徒関係から」

南タイでは 2004 年以来日常的に暴力的な事件が頻発し、いつ誰が被害者になるのかがわからない不安な状況が続いている。朝いつものように出かけた子供が帰ってこない、村のモスクに礼拝にいった夫が殺されるといった、今日と同じように明日も平穏無事に暮らせるという生活の安寧の根幹が破壊されつつある。そうした人びとの日常性が破壊された状況は、現在の大震災による日本の状況に通じるように思われる。南タイの紛争地域の人々が、どのように生をたちあげているのかを見ることで、いかに新たな希望へとつなげることができるのかを考えた。

(文責: 西井)